



Merah Putih

福井県立大学の植松宏平先生からバトンを受け継ぎ、リレーエッセイを書かせていただくことになりました。植松先生と私との関係は、私が福井県立大学から信州大学へ転勤したあとのポジションに着任されたのが植松先生ですので、同じ下宿の前の住人のような、不思議な縁です。一緒に研究したことはないのですが、研究分野が近いことと、植松先生の温厚なお人柄により、仲良くさせてもらっています。

誰にでも、不思議な縁でつながった人間関係はあると思いますが、ここでは私とインドネシア人たちの不思議な縁について書こうと思います。タイトルはインドネシア語で、merah は赤、putih は白の意味です。すなわち「紅白」ですが、これは上半分が赤で下半分が白のインドネシア国旗を表しています。私がインドネシアを訪問したとき、学会会場に国旗があり（なんとなくおめでたい気分になります）、開会式で merah putih というフレーズが聞きとれたので、あとで「日本の国旗も merah putih だよ」と言ったら会場で笑いが取れました。ちなみに私はデンマーク人とも共同研究したことがあるのですが、デンマークの国旗も merah putih です。またその共同研究者は以前カナダにいたのですが、カナダも merah putih です。今後、スイスやトルコ（ほかに結構ある）の人たちと共同研究する機会があるかもしれないと思うと楽しみです。

最初からインドネシアという国に興味があったわけはありません。ある1人のインドネシア人から交流が始まりました。写真の左側の女性は、Dyah Iswantini さんで、学生時代の1年先輩です。京都大学農学部の池田篤治先生・角谷忠昭先生・加納健司先生の研究室で、5年間一緒に学びました。日本語のレベルは私の知るインドネシア人の中ではトップクラスです。たいへん心が広く親切な人で、私の誕生日には「巽さんはビールが好きだから」ということで（イスラム教徒で酒を禁じられているにもかかわらず）スーパードライの2リットル樽をプレゼントしてくれたこともあります。私にとっては姉のような人で、実際に彼女の2人の娘は、私のことを Om Tatsumi (タツミおじちゃん) と呼びます。

Dyah さんは学位取得後、IPB 大学の教員となりました。私は何度もインドネシアに呼んでもらう機会があり、そのたびに彼女を起点として、「Dyah さんの友達」「Dyah さんの友達の友達」といったふうに入脈が広がっていきました。IPB やバリ島の Udayana 大学で授業をさせてもらったこともあります。また、日本で使わなくなった電気化学測定装置を輸出し、現地でセットアップしたこともあります。もちろん、私の研究室で受け入れたインドネシア人研究者・学生もたくさんいます。

残念ながらインドネシアの研究のレベルや学生の基礎学力は、日本ほどではありません。そのような国の人たちと長年交流することにメリットがあるのか、と思われるかもしれませんが、私はすでにインドネシア人たちが



Dyah さんと筆者。京都のハラルレストランにて。

ら多くの良い影響を受けました。まず、人間のおおらかさ。日本にずっといると物事が何でもきちんとしていなければならないような気になりますが、行き過ぎるとストレスがたまります。インドネシアでは kira-kira と行って、大体・適当・大雑把に物事を済ませることが好まれます。慣れると快適です。もちろん、kira-kira も行き過ぎると問題ですが。もし私がインドネシア人から何も影響を受けていなければ、きっと神経質でピリピリした嫌な奴になっていたと思います。もう一点は、人々の目の輝きです。ちょっと Nietzsche 的？に言えば、人生を肯定する力、でしょうか。インドネシアで授業をしたときなど、学生たちの意気込みと積極性に驚かされました。彼らは「将来この国の科学技術を私が支えるのだ」という目をしていました。日本の学生たちにしばしば見られる、死んだ魚のような目とはずいぶん違います。インドネシアではまだまだ大学進学率も高くないので、彼らにはいい意味でのエリート意識があるのかもしれませんが、それだけではないような気がします。ぜひ、日本の学生たちに見習ってほしいと思います。

長年にわたる Dyah さんとの交流のなかで、最近ようやく初めての共著論文を仕上げることができました。そこそこ内容に自信があったので高 IF ジャーナルに投稿しましたが、門前払い (editor 却下) やタライ回し (他誌への transfer) を繰り返して、査読すらしてもらえませんでした。そんな論文をきちんと査読したうえで採択いただいた *Anal. Sci.* には、たいへん感謝しています。

次のリレーエッセイは、同じ研究室の高橋史樹先生にお願いしました。私を含め、3号続けて「信州大学理学部・分析化学研究室」の教員が執筆します。世の中の流れで「分析化学研究室」の看板を下ろしたところも多いですが、われわれは細々と生き残っている絶滅危惧種です。乞うご期待。

〔信州大学理学部 巽 広輔〕